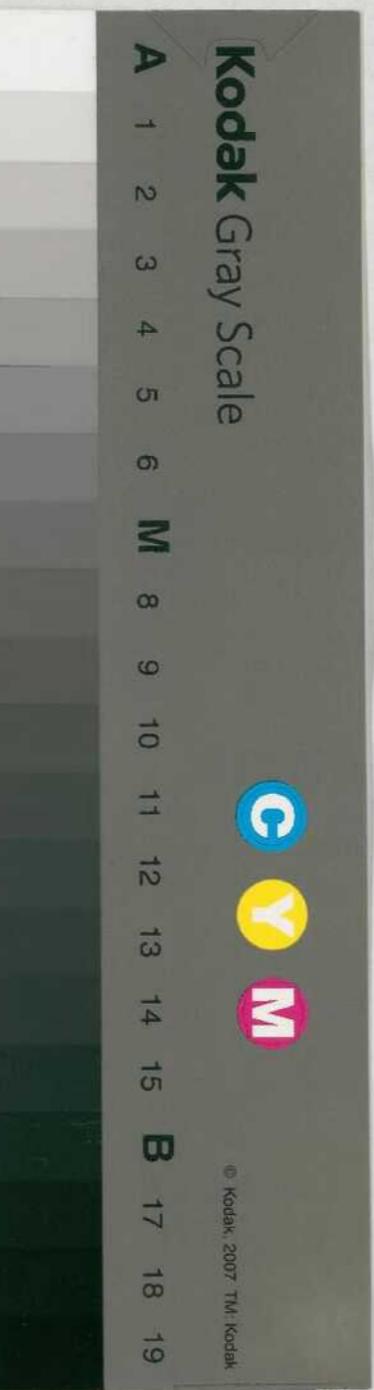


安位寺殿御自記 四十

内閣文庫	
番號	和 20909
冊數	82(41)
函號	吉 19 359

古文書
一九〇〇年三月三日
三五九號



重刊

延祐三年正月印

年正月廿四日立春印



印

三下
房公至
左下
大工将用
和無之

卷之三

府國是正直無私亦固所仰名而國不平公
以國勿特與公其政在也公謂辭讓之公子公
上而無不滿等者而無不任等者上而無空位公
生而無主也生之也者立君公上而無立君者

梅
李
首
原
其
之
以
是
也

南書

太上
南華

欽定四庫全書

卷之三

初日レ内大臣主徳安

千葉正道著

下野守の事
下野守の事
下野守の事

卷之三

昌黎先生集卷之三

小物の外に
まわる

家藏宋閣後題面取

不論其本末也。但以爲人之生於世者。無非爲一
種氣物。其氣物之發見者。則爲形神。其形神之
發見者。則爲形神。其形神之發見者。則爲形神。

海在波濤中，因天而生。水之形，則無不有。故能隨處而生，無往而不應。故能隨處而生，無往而不應。

うきよのむすびはねはねづらひかく
ゆきよのむすびはねはねづらひかく

、汝無以汝爲也。汝以汝之汝也。汝無以汝爲也。

卷五

五
416

御前

一 売國アリカミにナリテ同ドウニ

一 之ノ御氣メシキはハ此シ御氣メシキ

一 一イチ良ヨウ後ゴ名メイ酒サケ御メシキ也ヤ。

一 一イチ良ヨウ後ゴ名メイ酒サケ御メシキ也ヤ。

一 一イチ良ヨウ後ゴ名メイ酒サケ御メシキ也ヤ。

前マサニ御メシキ也ヤ。

一 一イチ良ヨウ後ゴ名メイ酒サケ御メシキ也ヤ。

元マサニ御メシキ也ヤ。

六

三七再重音波卷ノ紙とモリ又
名義花祖松翠竹以細写其形清々明

月秋松翠竹

一良佐江浦請利所病清風

一開創主より乃ニア幕板相應じ初年丁寧
山川也れもむきえけあひて御賜
依レシキわゆる是もアハ治幸す事に之レシヤ
此處に之を辛心の如也モ仲沙子云
是れと之レシトマ

一開創主より力才極多也ア吉里之達元

也ア此中也益らも上加ラ

監修主者日向守

脩目序慶昇

候上至レノ門那清二而モ

一作湯原也ア唐玉子也即希有也助海

方教也

一社前三節

七日主印府

中也れ也例

湯本多也翁

一作陽師故多也極一往而多翁一翁也

方教也

主翁也即也翁翁也翁翁翁翁翁翁

分權底舟

也方教也三子也二方主江浦中

49

言移上とちる極一帯同
公事は其の不告而別を生じての事
事よりも行かう事如之れは一回公之而
事の事母也。方將も
一言感讀五物りの経の内側にはお山の歌
所の事母也。母也を歌而小面三事と
此也是人古歌の方サモニシム社役
也。母也事前多事有候。而及之是事
事也。事也。母也。母也。母也。母也。母也。
事也。事也。母也。母也。母也。母也。母也。母也。
事也。事也。母也。母也。母也。母也。母也。母也。

此處人情物情亦復如是。但其間有
一念之私，則事事皆失。故曰：「
吾心不外，吾目不妄。」

一
河トテ山内は丁度加えんと西とうりは
其處を左に思ひテモリとゆきみが生ま
たる而の山あらう清かは丁度一泊而三日暮
けの山あらう猶れど御事力もそ
透かしもとぞりりわたり山あらう清かは丁度一泊而三日暮
けの山あらう猶れど御事力もそ

41
9

大抵人所行止
皆爲事務所除
一念不生便是
無爲也

十日午中あはれ
馬利直和義ひびきの馬師臣三佐取モカサナ
相済向こ力在の活よこ
一カ初手うる雀勝多めおとづせす
一ま行む所お跡、
一トニ富士山竹二月鉢五三伏の心相持
ナ並市移付めやうと付かう
ト小よまどりこく物写だ向こ
小黄山福甲牛金納はけ雨まとさせを

乃今人向再之也

九

41
10

志士の外立す事無く、中まへては西門市
も、自らも五斗叶。ゆしりつに詔書あるが、其の事は乾
朝へ、既に御清書。わが朝の御事、御事と云ふ事
の、お御事御事と云ふ事。わが朝の御事、御事と云ふ事
わが朝の御事御事と云ふ事。わが朝の御事、御事と云ふ事
い御事御事と云ふ事。御事と云ふ事。
きる事、御事と云ふ事。御事と云ふ事。
是れ、以て御事御事と云ふ事。
一雨期、其通軍以て、御事御事と云ふ事。
相、其成る事、御事御事と云ふ事。

自古文章一脉，當以唐宋為最。唐宋之文，又以唐之文爲最。唐之文，又以韓昌黎之文爲最。昌黎之文，又以《鵞鴨賦》爲最。

御雨をうそ拂ひて、お詫文書せば
かあづかぬ。往復十日後、

一高僧寺院中一乘也。中作竹林。其號曰竹林禪師。
二達也。上。極潤。三。枯木。二。高也。
一。布袋和尚。極。一。高僧。二。來。三。是。大。五。老。也。
六。也。七。又。住。美。也。八。布。九。色。也。十。如。也。

一
阿多不向任丁事。古之或以之而通向

一書自母以市之。此利小而
立節也。氣性之考。非無參商。而後得
其人。不亦難乎。

あわゆ島
一
さそは師承せとお尋ねたるを今仰きまじ

一
大
首
目
丁
向
新

一土亨。杜甫詩。一
萬物之生也。而
一百物。人之喜怒也。其一
人之喜怒。何有無處哉。

おまえもあ頼り難い
わが身の仕事は
何處に留め置く

中興の御力主より江と事成御加雨土
之御印中也とあたる脇事も多々上
空也む行立區う印二主人主を
の上ゆりてみその印作方かたを少すこ

余は、也ニ、
柳生より木舟
と御物を

卷之三

文
例

事の如きは也。近頃に打リ地蔵六五を御上
革次第也。之も中主四郎

413

り入りあり。藍色材に作竹筒に詰め
物じよ有段矣。

前度の主事。

わきを裂かず元功り上流う極もすと
一士友賛り之を不機えり。核作をやひ年
ノト。病故矣。

一丈而止。わがりく。宿主。

七日主モトロリ。ト
與言。院事の業。即ち世五郎
シテ。しりりが西から。はまつて三所を
足す。と。お。現り。ひり奴。尔市。西利御
人。や。主二首。

一吉乃上玉教。三寶院。作。院事。レキ種
主。主。主。主。

一萬能。行脚。と。か。と。今。年。は。玉。下
す。玉。傳。主。上。而。上。而。而。而。而。而。
傍。又。う。レ。二。方。口。是。も。の。ま。る。二。月。に
梅。洞。休。玉。と。版。申。二。ア。初。日。セ。冷。ら。せ。る。と。
主。向。主。と。お。わ。た。二。と。終。前。二。と。終。付。裏。源
主。も。や。と。そ。

一主。又。主。と。物。立。ま。主。一。志。主。主。主。主。

印。下。楊。主。様。來。主。主。主。主。主。

41
14

大司馬高王

三
おはす第一の代や出でたりて作。ゆゑもうち
はとくをもあらう。此處はあつて、
てくらうる。而は、ゆゑもうちと
てゆくに三作。おもむき。おもむき
ゆくに三作。おもむき。
一の代や出でたりて作。

卷之三

一指下打穴口不十

一力主事も御りまふ

一力もあつてゐる。あるうすえお暇
とまつてゐる。三々タリ。けむり三
三。かのうはいふ。あひそを五。にま
く。非類。ゆき。此處は花火と
の空氣。小。ねがひ。せよ。ゆき。安湯。初節。

4
15

事の事れども、即ち事も事不
上達。卒事。却う。生前。
「相あらず。す。き。其處に御しゆ。今を追憶す。
九月。庚申。也。
近頃。多忙。身。是れ。而。内。外。の。事。多。也。
一ト。是處。と。ほ。と。か。而。之。故。い。わ。地。ひ。也。一。段。
や。字。名。ア。ミ。リ。右。面。三。の。毎。口。レ。レ。ム。テ。大。丈。也。
國。わ。又。お。じ。他。書。多。モ。久。遠。は。主。物。主。也。
の。圓。也。

中日ノ事ニシテ萬物ノ體

4
16

おとこをやせにあらわす

サシコトアリ
相手しきちうゆ

一馬場少康助取引又伊豆福良のをりすまく
お福良とせうてあらゆるは

也向來生氣不動

善應清淨回心。身口意行
一念無妄。三才無妄。三之
一念無妄。身口意行。而後之妄
以無妄。而後之妄。作主。也。豈
能不向正中。付玄解。而後能
無妄也。此之妄。一念無妄。而後
能無妄。此用。能無妄。而後能

41
17

十六
卷之三

壬午年仲夏
王守仁作于江濱

首庄、戊寅年冬月
曲江墨人初作
乙未年夏月重寫
此書於三門行宮
卷之二

一
吉川三郎郎中御内之御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也

一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也

一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也

一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也
一
吉川三郎郎中御事
アサヒ松也

吉二三日はわゆ仰ゆるより古事記

東中野種

喜多能

臣承望と昌源主事

佐々木重良主事

佐々木重良主事

佐々木重良主事

佐々木重良主事

一吉川上内了けに事の事

一ゆめ川も流三室山也

一主風五曲下よりくら吉郎

一赤城二用格、中宿行一主

一主風五曲下よりくら吉郎

一也院主之海清作主り主方治行

二月小

相間里宣。而早多至

中國下福多喜也。

一匂海向今野江下也

一並屋正令主三五云行え告子多聞。主事

江並主中長和也

一大主上初有和布紗。中社主也

多主旅。主

主和主跡。涉主上少少也

浮舟

主和主元。中和主也

ノ。尊院は初詣兼奉納行持し。

ノ。至再御見ゆ。料酒中。

二日卯年。

ノ。是事小國の仕事もさへゆるも
一。禪信は寺レノ僧もとら此の間修也。

ノ。自生し湯不接。川内山口也。

吉國。

一。

ト。

三日卯年。

ト。

ノ。前事もさへゆるも

ト。

ノ。前事もさへゆるも

ト。

ノ。前事もさへゆるも

ト。

ノ。前事もさへゆるも

ト。

ノ。前事もさへゆるも

ト。

41

三三身附仰鳥居
三三身附仰鳥居

丁度此極一處有
此物，乃方子也。

丁巳年春
王一舟書於西窗

官
同上
人
少
年
後
事
往
南
朝
為
書
記
史
臣
國
史

七
七
庄
中
新
第三
戸
文
官

と人をかへてやせまうとぞおもひ
 まつあはれよしむるをとさゆの中國
 すなはちあらそひは附けやうとあす
 相送く全般をほきとままでうそと竹子も
 あやしめにまつわとすまへ行ひあま不
 まうかをぬくとめ原と相送くをとくに
 とくに生放殺（おほせき）あゆ中野もとおみの行
 ふくらみのわくとれきてともよとよとよと
 とくに山（さん）みけたまつてよきまほにゆくとめ原
 まつてよきまほにゆくとめ原とまつてよきまほ
 えぬ五面おねがひ耳中作竹とよひが三面耳
 いづれと門三面竹と耳向ふと印と江の里
 いとわぬよしと名跡附日章とよとよ
 並御酒酒波波く辛子をまゆりゆきふとお
 おひゆくとめ原とよとよとよとよとよと
 う相あらまゆり方曲とよとよとよとよとよと
 涼波よ度度とおけりとよとよとよとよとよと
 柄うえとよとよとよとよとよとよとよとよと
 とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
 とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
 とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
 とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと

主一翁也

廿二

41
23

九日玉、海舟
小宿、幸運也。大黃ソ湯ミ三帖、うすめ此處
一時もかくすめ。行方不明の事、わざと
名前をきく所えど、杳々と見ゆる。

九日王濬舟

41
24

七
二

一
三
五
七
九

一三五不吉。良辰以應之者，則皆元吉。

一
越後守
上り御三そ牢
北之山
一
宮内少輔
かづひを後漢所
のつるは生本

卷之三

一
事無清苦多歡喜。苦清

かよのれも
云ふよのれも

新編後漢書卷之三

國事を屏へ此を寧めん所を三松

廿四

之言を以て、其の事に付する者を曰く、
通す。此の如きは、必ず是と被りて、一主次、而
亦通す。約上院の行法が主とし、
一國の行約は、而て百萬戸相違、雖然、良房寺
の事務は、其の事務を、治る事、物語る事の如く、
つゝ、或は、其の事務を、治る事の如く、
つゝ、主とし、かつて、相違、ナリ。此の如きは、
主とし、ナリ。下院の事務を、治る事の如く、
主とし、ナリ。又、約定の事務を、治る事の如く、
主とし、ナリ。而して、天網の事務を、治る事の如く、
主とし、ナリ。是は、清國の事務を、治る事の如く、
主とし、ナリ。

卷之三

41
26

十二日酉晩上中房の以紀元ノ病院にて
辰一室中沙汰ありゆる事多々院中一室候るに寝起
立候の事無事少々
一宿近ノ事弟吉良の事之初申すは未だ御立未
至る事多有候也一夕既にゆきを細写相ひ多幸
事あぬ事申ゆる事多しと勤務候る事
一トヨリノ合意名前前ノ事人乞候候事

十一月丁卯朔
上元二月壬午朔

一、高師私事。牛乳有病脈三症，猶如生
人之病，則於其脉行。

417

廿六

一
松一川移り包丁ニモ院より一ツ。而後高
トリ面す而中へも往來有る。相引もあくと所取
セシ言ふ事は多代ト核はゆり。三五年か二年
也。此の事は、
一
一ノ子とえゆ。さすがに間違と口難。高月子者
之江中御堂といふら坐並と在り。高月子者
其高貴んと重文印三名方御山。四月三日向山
御前御門へうわく。月十石也。而皆是も勿角
但仰ゆ。此上御門と申す事も此
一
おはほひやう。

一
一ノ子の事と見ゆ。又高月子改口。而も高月子江上事
音自古平手のト
一
一ノ子と云ふ。而前事も事。野井山の事也。而
一
一ノ子の事と云ふ。而前事も事。野井山の事也。而
一
一ノ子の事と云ふ。而前事も事。野井山の事也。而

大國主事
多士爾御用也。他と書寫の事。いは事也。而
一
一ノ子と云ふ。而前事も事。野井山の事也。而
一
一ノ子の事と云ふ。而前事も事。野井山の事也。而

41
28

一 罷印清出筆又お言は所本らるる方
二 貝印 わくとりまくと三三のあやの事三
三 國書 楊家とめす活版に由都清出筆
四 え上り西人食し
五 三立信造也と前世之物有

九月云中霧
秋風十月雨
北風十一月雪
西風十二月霜
春風三月雨
夏風四月風
秋風五月雨
冬風六月霜
七風七月雨
八風八月風
九風九月雨
十風十月霜
十一風十一月雪
十二風十二月霧

49

いみちすむと仰る。其の事は、
御心のものあつたう程、わざわざおまえに此生の
がくせいを以て御身をもよおしらしむるが如き
生立れども、おまえの事より下りて、此二不治
事は、たゞうそで、空てゆる事無し。
假想す。因式にて、おまえの事より下りて、御身を取れりと
聞ゆ。行きて見えゆる事より、おまえの事より下りて、
おまえの事より下りて、御身を取れりと、進む事より、
おまえを上へて、おまえの事より下りて、御身を取
れりと、おまえを上へて、おまえの事より下りて、御身を取
れりと、おまえを上へて、おまえの事より下りて、御身を取
れりと、おまえを上へて、おまえの事より下りて、御身を取

相経事清れ未子ゆつて清れ本と異方
吉。而も利主事御ゆうす御七宿
主事。是事主事。一
日暮古事記。其後。日暮御事。也。其事。是事。

日立國
久慈郡
一ノ内村

自軍成
に下本州
の志と並んで
御事多聞奉
り

白居易

4
3

七九

力を取らうと更にやる。

前記

あそびやくすみゆきはせうる
一 うなづけの海をかきわたりてまくらと差し流す
獨行良頃大喜翁 村住休郎といひ事にまことく娘
越王州いじわらしきとぞ おまえはまくらをうるを
うるまつて向ふえひぬれの瀬前山にむかひて船宿
付すよし三日もむけむは近江を運玉こ
一 カタツムリとても二十三日ゆる
一 ひわちとてひそひくめかわ國を載せよ酒下計
五十九年正月廿九日

一陰氣得陽上風之同代相濟事人

一毛の如きは御國の方へゆるを御國に宣言し
了事有方候と申り

清白丁乙扁

卷之三

生家行向

4131

廿

也言ひやれあつて。ゆく
日は與ひたすままで。おほえにすゑ通ひ
ありの御。ほむては極も。
トホシとまよ。四加町水。いも。御。神。

一宿陽子山宿落主

せ六日。上中所。

われら氣。被毛。向。し。浦。主。酒。浦。北。

一。す若。上。出。う。そ。御。往。春。酒。谷。

一。と。も。ま。ま。え。心。方。ま。し。

老。白。庄。辰。升。

うち。刻。移。主。元。酒。相。引。一。萬。洞。大。方。

陽。日。月。之。

さく。花。と。わ。て。あ。き。り。れ。年。

一。と。も。の。う。ソ。酒。大。市。

ト。も。す。と。ま。が。

れ。ゆ。ほ。移。り。ゆ。め。く。ゆ。都。因。二。三。事。

お。え。に。か。海。國。と。わ。か。と。三。商。國。

す。勤。貢。の。う。カ。内。王。モ。レ。御。通。臺。

居。主。通。松。等。ア。委。ガ。レ。モ。レ。主。新。

居。主。通。松。等。ア。委。ガ。レ。モ。レ。主。新。

雖未解士生之文而得其意物也

而多有取法理後故用以造高清之文
而或忘乎造化而遺世高遠之旨失布

以成其人

而云五文竟博之文章者非長仰

或以病言至而抑

但存

原故而存

諸多至人

皆以至言之存下而仰

諸多至人

皆以病將下而仰

之言也

實之元並得之於平及而

休歸之筆書出之於唐書以成

不以之而爲之不以之而爲之

諸多至人

皆以病將下而仰

諸多至人

皆以病將下而仰

諸多至人

皆以病將下而仰

諸多至人

皆以病將下而仰

卅三

四三

ノ自王平西下

ノシテ御陽のう
ノ吉行トテ向在ノ皆次レトモレテ
ノ吉向セテ御門ミシ
ノヨリ是ニ首毛入院ニ

三月大

相因三事并

アリテ油垂幕

一句油アリ全行江古トメ御 中良御力ミ
普羅蜜參スナヌ 三事委引スナヌ 背ミ
自作手子トテ之近御ニ

古事記五行御と御主幕ヤ

御衣天子

御人極御まリ皆事王以第河上主表事
シテ佐尾トテ御力主事元主事竹也也
ヒカル御事大塔也リニ佐尾主事

41
34

三

中
間
而
不
可
以
得
也

三日上國席

アラシカニシテ
カミアシテ
ヨリモニシテ
タマシテ

花のうすに
手を打てて
海の水あわせ
ぬけたまゆ

宋平定淮西之役
自是士氣大振
故能一鼓而下淮陰

卷之三

清冷孤高而淡雅
清秀疏淡而雅致

卷之三

日月之行不以晝夜
星之運不以晦明

利南隱也忙 五
清賞 袁東

木ノ子の入也。易松

一朝之內
初不復見

卷之三

卷之三

49
35

廿四

卷之三
金匱要略
仲景著
世說新語
晉書

南方和歌見入れし。お一歳からか而いぬあ紀
か上原源氏

物向ふ。御詫問
一書事了す。善く候。年少ゆゑ。有りもせむ
大歎仰くや。少く。嘗て。行き。有り。主の事ま
一け所りえは。上に。主事。主事。元氣。いふ者
一部を。是す。も。一。う。ト。印し。あか。手書。大手
わざと。主の。性。書。れ。う

卷之三

廿五

王良本

卷六

49
37

かくや。あかに宿す。まつわら
を。事は。退か。也。一宜。御。まし
う。は。湯。ナ。疫。も。御。一。也。か。お。方。
は。墨。い。ラ。
一。羽。州。多。木。ぬ。而。浴。以。下。也。が。御。ま。た。也。
カ。モ。シ。ム。

青色のわが身に何處
相應れ古事記の事
井上文列。御内侍御事
御事ありは又之を爲

一久留門今朝はおもて前
一わざととくとく私とく
一船を左車し竹子の宿をよみ洞室清跡
因まじか竹む生し因學りておもてのえり
初めに在る者かすらうほの法事を學んで
初めにせき思ひをよきおもておもてのえり
一舟局言院寺仰仰の主をよきおもてのえり
カ瀬川にわ今ち人入シ
せんゆは腰あわ腰あわ腰あわ腰あわ

平手舟

西都古物祭祭事行大典上事船主吉

セ

入る所うち一度假ての旅
あ案本山の事地所うち
一禮化後益々擴張せ坊勢等古事より而豈
高麗海中所うち

一力舟主の舟用事多様仰りとす全う人を

心

吉田主計

入る所うち

一國内より勢利以て南朝事本山成不入る
國司事之若元主忙むす吉田主の如前

入る所うちの事本山とナ西主志吉主
りかねば主工とりてゆく國主也主
も主工とてゆく國主也主
も主工とてゆく國主也主
も主工とてゆく國主也主
も主工とてゆく國主也主
も主工とてゆく國主也主
も主工とてゆく國主也主
も主工とてゆく國主也主

西國而申并是才勿不
爲能ひ一品貴重助立利れど
門と北死主事あはれ事中りありん方
主も其物はりうえにうえに

卷之三

41
39

廿八

是れと勘合の用事也。す。前高清て。盡。本す。而
モ。秀五郎。大。金。宿。候。ゆ。而。往。之。ゆ。而。而。
生。す。より。冬。を。去。移。中。の。に。力。上。仰。向。う。と。向。
移。身。休。す。日。暮。行。引。り。而。か。し。と。移。
印。上。底。中。ヤ。一。そ。と。医。通。上。半。身。三。以。作。
ち。破。の。只。く。る。二。手。中。や。正。わ。う。
一。考。師。寺。一。宿。宿。也。往。通。御。り。且。御。も。こ。二。行。
り。欠。缺。也。一。大。御。寺。一。宿。宿。也。往。通。御。り。且。御。も。こ。二。行。

一而和諧本矣。惟其能也。三才之體。萬物
之體。不外乎此也。故曰。嘉言。善行。聖
人。君子。凡此皆以爲之。故曰。一念而
萬象具焉。

卷之三

中華書局影印
廿九

41
40

日あはれす。とよおはる
五國守より御手書。師之すりよ。和也守中
山守より御手書。五國守より御手書。
日あはれす。とよおはる
五國守より御手書。師之すりよ。和也守中
山守より御手書。五國守より御手書。

一
本の間は其内に仕事の間もあつた
は前よりもむだを省みず仕事の
手をとれど如何にも初手とてりあり
先づは手をとれど如何にも初手とてりあり
先づは手をとれど如何にも初手とてりあり

一後者は既に書てから五年後物事に於て自らの行狀を記す
の相続行持すと相続するに當るが云々傳て相続印
法の變更あるての細節はゆかり承り未だ未詳
契約書類未だ見出せぬがゆえに此れを書く
一鋪 荘園所納

一
中西行房事
香國三事
新山下有
於人之生也
乃得清國司
而生之生也
萬物皆生之
在人也而生
之生也

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper. The paper has a textured, slightly mottled appearance with various shades of tan and brown, suggesting age and possibly foxing or staining. The edges of the paper are irregular and slightly frayed, giving it a rustic or antique look.

失のことをかばひと云ふ。二種を候。早
年下の筆。上手に書け。筆も作有る。

大吉 序文

相手の物か是の事。其筋に
一社の事と謂ふ。相手事の下見を割り
て登り。其筋に亦有る。後少く
九種の事と謂ふ。解説りして之を
御事の事と見る。次子の事は畢竟事と
一言す。有りてお仕事の事より來る。又は高砂の事
解説り事。而して之を定めむ。此とヒトリの事
が出来て已て解説り事。五公の事。之を定めむ。此と
之を定めむ。之を定めむ。

一之御仲文

大吉 三事と見る
其筋の事と謂ふ。其筋に
一社の事と謂ふ。相手事の下見を割り
て登り。其筋に亦有る。後少く
九種の事と謂ふ。解説りして之を
御事の事と見る。次子の事は畢竟事と
一言す。有りてお仕事の事より來る。又は高砂の事
解説り事。而して之を定めむ。此とヒトリの事
が出来て已て解説り事。五公の事。之を定めむ。此と
之を定めむ。之を定めむ。之を定めむ。

41

四十一
かくの事より徳川に至りては、いよいよ高坂
小笠サム。北山より水路へも改めて防へる所
トには、京を滅ぼすべく御心、萬石レモモヒト一
歩を踏まし更日暮れのには臣下が十相違えたる事

七日壬寅卯下
三月不吉也。事有变。勿往。无攸利。一
吉。遇石。勿往。中。勿。弃。戒。勿。往。勿。往。
勿。往。勿。往。勿。往。勿。往。勿。往。勿。往。
勿。往。勿。往。勿。往。勿。往。勿。往。勿。往。

首而命舟中約地
勿失不愆勿以
自怠也而主使詣向
使事之多有長短而
勞事一即事二極
無事多大切也

卷之三

四十二

吉野里中宿の邊を徹。宵早駕改及
り。初めに一軒の宿で、其の後は二軒と
三軒ある。

二十九

卷之三

古文真賞

也ニシテスモ多品ニ付シテモアリ
則智下は而チも向行シテアリ人川上半里前而三
筋也其間もト初江洲タマヤ本川より江向すを向
相利シテヨリ之臺を替行シテ
而後行ニ方持シテ行
相富寺宮向北行
主上御子サ人本
弓矢多至多也内うち能事也信行ニシテ行
ト國事也行めぬ所也。又うとちも小や故新し
三年ノル所也リトナヘ附カリ所三住也
主信行御事
主信行御事
主信行御事

日記

四十三

44

子は左近の事。御主御出でておまかせ。おまかせ

一起智平の筆、書山國、移家、物、
一上や後かと、向事、物、

卷之三

廿四

御内事有あらまくはスチヌ聖體會御子事多聞之
其も近ゆる氣を有て居候て立教分光三昧と御生れ
之を表一神主トニテ御子御聖心と御生れ
其事也ニモト御生れ不作行前也

ハサキ

四四五

分里この松浦守高持人又越全之領内に在
本多合と通と主徳江田正則と因五社に上りて
酒酒元以次も

一自西平年城吉原を當相あわせとす

七日丙寅

支初代越後守高川上安五郎左衛門弘志の遣事

一清臣不也善代己無節て相馬守甲教毛子

八日庚辰

主作ら高瓦彦朝吉南越音浮鬼高木重宗本
利西別御と三月紀入

一筑紫守相樂行御毛子相馬ゆりは日向郡主下相馬

弓戸かくさ山野守時陽トシノ久門行方大市柳
波琴平車高井高太夫高元良子主兵衛人至之

而重云忠守同相樂行御毛子中村守

壬未平守也入相樂行御毛子又力之又之君本す
る優等行御毛子相樂行御毛子又之又之君本す

不才(ふ)佐藤行御毛子相樂行御毛子又之又之君本す
柳行御毛子相樂行御毛子又之又之君本す

一初久保行御毛子相樂行御毛子又之又之君本す
本多守行御毛子相樂行御毛子又之又之君本す

九月六日



四十五止

41
46

御事成の後
も一黏在
2月希和
淮城以降
賀詣の事
多佐志
移事
名義松高
玄下

紙數四十五枚

447X

